
桜が丘高等学校軽音部の6人

螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜が丘高等学校軽音部の6人

【Nコード】

N4472BA

【作者名】

螢

【あらすじ】

共学化された桜が丘元女子高に進学した北村 匠、桜が丘高校の軽音部がなかなか有名だという噂を聞いて、軽音部に入った、彼と軽音部が送る日々とは・・・

プロローグ（前書き）

どうも、螢です駄作とは思つかもしれませんがぜひ見ていってください。あとありがちな共学話です。

それではどうぞ

ブローグ

「ここが桜が丘高校かあ」

校門に立ち、のんきにしみじみと呟く青年

「にしても・・・全然男子が見当たらないなあ」

キョロキョロと周りを見渡す青年、だがそこには男子の数はポツポツといるかいないかぐらいにしか見えなかった。それもそのはず、今年に入って初めて共学化になったのだから。今年の一年生の男子比率は全体の半分の半分の半分以上といっても間違いないくらいだ
「まあ、頑張りますか」

そう気合を入れて、青年は校舎のほうに歩いて行った

『続いて、校長先生の話です、校長先生お願いします』
コツコツコツ

『ええ、一年生のみなさん進学おめでとうございます・・・』

「あゝあ、入学式ながいなあ、」

入学式にケチをつける青年

「だいたい入学式なんて、半分以上が校長の話で終わってってんじゃないん

それにぜってえみんな聞いてねえと思うしなあ」

青年の不満はエスカレートしていった

その後校長の話は約15分ほど続き、入学式が終わった

こうして、青年の高校生活の第一歩目が始まった

プロローグ（後書き）

こんな感じなんです、プロローグはあんまり思いつかなかったのだから頑張ります。

プロフィール（前書き）

どうも、今回は主人公のキャラ設定です

それではどうぞ

プロフィール

主人公設定

名前：北村 匠きたむら たくみ

生年月日：1993年7月3日

身長：180cm

体重：73kg

パート：リズムギター ボーカル コーラス

血液型：A型

利き手：左手

外見：肩まで伸びた真っ黒なロングヘアで、目の色は茶色、また帽子をよくかぶりプライベート、ライブなどでは必ず被る

使用楽器

ギター：ギブソン ES-335

桜が丘高校の軽音部が有名という理由で桜が丘高校に入り軽音部の唯一の男部員であり、少し肩身の狭い思いをしている様子、感が若干よく、危ないと思ったことはだいたいが当たる、逃げようとするが、軽音部の先輩たちにすぐにつかまってしまいあまり役に立っていない様子、また作詞・作曲を一人でやって見せたり（中身は少し乙女チックな物と、生死を考えさせられる物がある）、声の高音などの調節ができていて音楽に関しては長けている。

父親がアメリカ人で幼稚園のころから小学校4年生までにかけてアメリカに住んでいたため英語は寛容であり、彼が作る歌詞にも英語が入っていて、ギターの実績も長く小5から始めたらしい、また両親が外国で仕事をしているので家事は全部一人でやっている。幼稚園のころからアメリカでピアノを習っていて、人に聞かせる程度なら弾かれる。

かなり優柔不断であり自分一人で物事を決めたことがない、な
でコンビ二などに行くと小1時間ぐらひは、買ひ物にかかるか
らしい、また帽子が好きで数種類の帽子を持っていて、学校生活
以外（ライブを除く）では、必ず被っている。

利き手は左手なのだが右利き用のギターを使っている本人曰く「長
所は短所になる」という理由で使っているらしい。

視力が0.2と非常に低く、普段はコンタクトをしているがたまに
メガネをかけることもしばしばある。

唯や律によくいじられていて、当の本人は、先輩と話せるきかいが
できてうれしいと、ポジティブに考えている。根本的に人と接する
ことは好きらしい。

プロフィール（後書き）

気づいている人もいると思いますが、これはRADWIMPSの野田洋次郎をベースとして、書かせてもらっています。ちなみにけいおん！！の世界にはRADWIMPSは存在していませんがRADWIMPSの歌は出てきます。

それではまた変更があったらきますので

1話 部活！（前書き）

今回はちょっと原作にそってやっていききたいと思います

それではどうぞ

1話 部活！

小説本文 「ええ、ここの担任を務めることになりました。以後よろしく頼む」

と、教壇に立つて自分の自己紹介をする男の担任

「されじゃあまず、一人ずつ簡単に自己紹介をしていってもらうぞ」
そう担任がいい、前の女子から自己紹介を始めた、ちなみにここは、1年5組であり男子は4人しかない、そういうのも使用がない、何度も言うようだが、今年共学したばかりで男子が飛躍的に少なく、男子は20人くらいしかない。

「おい！次のやつ早くたたんか」

「あ！すいません」

教師に怒られあわてて立つ青年、周りの女子たちはクスクスと笑いながら青年を見ている

「ええっと・・・北村匠といいます。得に言うことはないです」

そう言つて立つたとたんすぐに座る匠

「・・・そうかじゃあ次のやつ」

教師は匠を少し睨み次のやつに自己紹介を回した

（ん？・・・俺いま睨まれた？俺なんかしたか？）

そんなことを考えていた匠、自己紹介が終わると教師が学校の設備や注意事項など話し、プリントなどを配りおえ、時間はほとんどたつていつき部活の勧誘時間になった

「うわあすげえなあ」

匠はそう声をもらした

『柔道部で熱くなってみませんか！』

『バスケット部です、新入生募集中です』

『テニス部です、初心者でも経験者でも大歓迎です』

いろんな部が新入生勧誘のため周りを見渡せば声を張り上げる女の子であふれていた

「なんかいあつがすげえな・・・ん？・・・あれは何の部だ？」

匠はなんとなく雰囲気が違うのをかんじ横を見てみると5人（匹）の動物たちがチラシを配っていた

「あれは・・・着ぐるみ・・・だよな、てことは演劇部か何かか？
てか顔コワッ！」

そう一人でしゃべりながら匠はその場を去って行った

「ふう、高校も楽しやないなあ」

匠はネクタイをゆるめなが一回の中庭に続く廊下を歩いていた

「にしても高校ってこんなに広いものなのか？・・・ん？あれは・・・だれだ？」

目の前に頭にヘアピン女の子がちょこんとすわっていた、するとその子は匠に気付きトコトコと近づいてきた

「ねえ、君って新入生の子だよねえ、うわぁ身長高いね」

そっついながら女の子が匠の顔を見上げた

（この子誰だ？・・・リボンが青ってことは3年ってことか、ってそんなに見つめないでほしいなあ）

匠はそう思いながら女の子から少し目をそらした

「ん？どうしたの？」

全くきずついてない女の子は匠にポカーンとした顔で言った

「い、いえ別にところで俺に何か用ですか？」

匠は自分の気を立て直し女の子に聞いた

「あ！そうだった、実はね軽音部で新歓ライブやるんだけど、よかったら見に来てくれない？」

女の子はそう言って匠の顔をじっと見つめた

「新歓ライブ？」

匠は女の子に聞き返した

「うん、私たちでやるんだー」

浮かれた声で答える女の子

「へーそうなんですか・・・わかりました、見に行けたら行きます」

匠は女の子のお願いに答えた

「え！ホントに？ありがとうー」

そっぴいながら女の子は匠の手を握り締めた

「えっ！ちよつと」

匠の顔はみるみる赤くなった

「おーい、ゆいー何してんだ、おいてくぞ」

と、どこからか声が聞こえてきた

「あ、うん待つて、それじゃバイバイ」

そっぴいながら女の子は匠に手を振りすぐに去って行った

「・・・なんだったんだ今は？・・・なんか余計疲れた気が・・・」

そっぴいながら匠はダルそうに歩きながら来た道を帰って行った

「まあでも、軽音部のうわさを聞いてこの高校に入ったわけだし、

お手並み拝見といくか」

そっぴいながら、匠は自分のクラスへと向かった

1話 部活！（後書き）

まだ続きますので、あと駄作ですがなおしていければいいなと思っています

それではまた

2話 入部（前書き）

今回も少し原作に沿っていきます

それではどうぞ

2話入部

「えーっと、講堂は……こっちだっけ」

匠は女の子に頼まれた通り軽音部の新歓ライブに向かっていった。

「いいだな……よし！」

匠は扉を開けたら目の前に5人の女の子達が目に入った。

「全員楽器を持ってるってことは、もう始まったか」

そう思い匠はあいている長椅子に腰をかけた。

「やっぱり女子多いなあ……」

そう呟きながら匠は周りを見渡した。男子もぽつぽつ見えるが、やはり女子のほうが目に入る

「新入生みなさん、入学おめでとうございます・・・」

ボーカルの子がMCを始めた

「お！はじまったん？・・・あの人ボーカルだったんだ」

そう、そのボーカルはヘアピンをした女の子だった、他にも髪が長いレフティのベースの女の子と、ツインテールのギターの子と、後ろにはカチューシャをしたドラムの女の子かと、クリーム色の長い髪の子の女の子がいた

「てか……女の子しかいないんだ……」

匠がそんなことを考えているとMCが終わり演奏が始まった

⌈
•
•
•
⌋

匠は前の五人を食い入るように見ていた

（なんだろう・・・演奏はイマイチなのに、なんか胸奥からぐっと来る感じ・・・これがうわさの理由の一つかな？）

そうして、演奏が終わり、どこからともなく鳴りやまない拍手が講

堂内に響き渡った

「・・・軽音部はいつてみようかな」

そう呟きながら、講堂を出ているなところをふらふらしていた匠

「でもな〜なんかやな予感がすんだよなあ」

だが何らかの危険を察知した匠はそう呟いた

「・・・明日決めるか」

匠はそう考え教室に戻って行った。そして下校の時間になった

桜が丘高校、新生が入り数日がたった

「う〜んどうしようかなあ」

まだ悩んでいた匠

「軽音部の演奏にはなんか引き寄せられる感じがあんだよなあ、でもなんか尋常じゃないほどいやな予感もするし。」

匠はとても優柔不断で、一人では決めることができなかった。

そうして授業が始まったが匠はまだ悩んでいた

「それじゃあこの問題・・・北村言ってみろ」

と教師が匠をさしたが、

「・・・」

全く返事がなくボーっとしていた

「おい！北村」

教師が匠の名前を叫んだ

「・・・へ？」

やっと気付いき匠は、間抜けな顔をしていた

「お前・・・入学できたからってもう結構立つんだ、切り替えぐらいちゃんとつける」

と、匠に向かって説教を始める教師

「ああ、すいません」

匠は周りの注目を浴びながら教師に誤った

「じゃあこの日本語を英語で言ってみろいてみる」

教師は匠に無茶ブリをした

「えーつとAlthough I worried several days before, since I have already solved, I felt it refreshed. (私は、数日前から悩んでいましたが、もう解決したのですっきりしました)ですか？」

匠はそんなことお構いなしに答えた

「せ、正解だ」

教師はびっくりした顔で言った、周りの生徒もビックリしていた
(そんなことより俺の悩みが解決してないんだって)

そう匠は、心の中で突っ込んだ、そうして時間は流れあつという間に放課後になった

「よし！決めた一回行ってみよう、そのためにこの学校に入ったんだしな」

ようやく決心した匠は軽音部に向かった

「えーつと確か、軽音部は・・・音楽準備室だったけ？」

匠は、この前聞いたことを思い出して、さっそく音楽準備室に向かつて行つた

「ここが軽音部か・・・この力エルなに？」

匠は、ドアの前に置いてある力エルの置物を見て言った

「それにしても軽音部なのに静かだなあ、ま、いっか、よし！」

決心を固めた匠は、軽音部の扉を開けた。

2話 入部（後書き）

まあ、とりあえずこんな感じですよ

それではまた

3話 新入部員（前書き）

どうも、話してときには、軽音部がとんちゃんを飼い始めたときの、後の話になります。

それではどうぞ

3話 新入部員

匠はガチャツと音楽準備室のドアを開けた

「あ、あのお、失礼します」

少し緊張して、声を詰まらせながらも挨拶をする匠

「……」

水槽の近くにいる4人の女の子達が、匠をじっと見つめた

（ん？なんでこんな空気になったんだ？……てかあれ何？すっぱ
ん？カメ？）

匠は心の中でそんなことを考えていた。そんな空気の中

「ああ！」

ただ一人だけ違う反応の子がいた

「きてくれたんだー！」

そういいながら匠に近づく

「ああ、先程はどうも」

匠はそう返した

「唯、そのこ知り合いか？」

ベースを弾いていた女の子が“唯”という女の子に聞いた

「うん、そうだよ、ライブ前にちよつと話したんだ」

“唯”が答えた。

「へー……でその子がなんで軽音部に？……もしかして！入部
希望とか！」

ドラムをたたいていた女の子が声を張り上げた

「……！！」「……」

5人が一斉に匠のほうを見た

「あ、はい、そんなところでs「なんだそうだったのかよ、それなら
早く言えって」……」

勢いに押される匠

「なんだ、そうだったんだ」

“唯”もぐいぐい攻め出した

「てつきり唯先輩が何かしたのかと思いました」

ギターを弾いていた2年生の女の子が“唯”に安心した声で言った

「ひどいよあずにゃん、そんなことしないよ」

“あずにゃん”というあだ名に否定を求める“唯”

「どうぞ」

そういつて、キーボードを弾いていた女の子がおっとりした笑顔で匠に紅茶を差し出した

「え、いいんですか？」

匠はビックリして紅茶を出した女の子に聞いた、すると

「いいのいいの」

笑顔で首を軽く縦に振った

「そ、そうですか」

そう言つて、匠は椅子に座り紅茶を飲んだ

「お味はどお？」

紅茶を出した女の子が笑顔で匠にきいた

「・・・おいしいです」

匠の顔がさつきよりゆるんだ

「ところでお前、名前なんて言うんだ」

カチューシャの女の子も椅子に座り匠に質問した

「ああ、すいません、北村匠つていいいます。先輩は方・・・」

質問し返す匠

「あたしは、軽音部の部長三年の田井中律だ！」

「・・・秋山澪、三年」

「わたしも同じく三年の琴吹紬つていうの、よろしくね」

「わたしは、二年生の中野梓、よろしく」

「あたしは、三年の平沢唯だよ、よろしくね」

女の子5人が匠に自己紹介をした。

「はい、こちらこそよろしく願いします」

匠は挨拶を返した。

「ねえねえ、身長何センチあるの？」

「180cmです」

「へえ、たけえな」

「ありがとうございます」

「楽器は何ができるの？」

「ギターをちよつと」

「じゃあ私たちと一緒にですね唯先輩」

「うんそうだね」

「まさか、カメの次に人間が入ってくるとわなあ」

「カメ？」

「うん！とんちゃんだよ」

「とんちゃん？」

「先輩たち話し省き過ぎです」

匠は、女の子たちとリズムよく話していた、だが

「おい澪お前も恥ずかしがってないでみんなと一緒に質問しようぜ」

律が恥ずかしがって、輪から離れている澪に言った

「べ、別には、恥ずかしくななか、な、ないもん」

澪は言っていることと、矛盾している口調で言い返した

「じゃあなんかたくに質問してみろよ」

「た、たく？」

いきなり、ニックネームで呼ばれて少しびっくりする匠

「うっ、」

核心を突かれて返す言葉を無くす“澪”

「ううん？どうしたんでちゆかあみおちゃん？」

律が赤ちゃん言葉になり、澪をあおった

「わ、わかったよ」

そう言つて匠のほうを見る漣

「き、き、利き手はどっちですか？」

漣は顔を真つ赤にしながら頑張つて質問した

「なんじゃそら」

「しかも後輩に敬語つて・・・」

律と梓の二人に突つ込まれる漣

「しょ、しょうがないだろ！」

漣は顔を赤くしたまま怒つたせいでもつと顔が赤くなつた

「はは・・・ギターは右だけど利き手は左利きです」

匠は愛想笑いをして質問に答えた

「えー!!」

いち早く反応する漣

「お、よかつたじゃん漣左利きの仲間ができて」

「・・・」

返事がない

「あれ?・・・漣？」

そう言つた瞬間漣は、匠にちかずき手を握り

「これからよろしくね」

笑顔で漣はいつた

「え！は、はい・・・／／／」

顔を赤くする匠

「すごいね漣ちゃん、男の子とうまく話せてるよ」

唯が漣に話しかけ、それに気付いた漣は・・・

「・・・」

返事がない

「あれ？漣？おーい」

「・・・」

全く反応がない

「・・・気絶してる」

「「「ええ」「」」

4人の声が一気にはもった

こうして匠は軽音部に何事もなく入部できた・・・かにみえた

3話 新入部員（後書き）

こんな感じです

それではまた

4話 演奏（前書き）

今回は匠が演奏します。もちろん曲はRADWIMPSです

それではどうぞ

4話 演奏

「ところでたつくん」

唯は匠のことを呼んだ

「た、たつくん？」

またニツクネームで呼ばれビックリする匠

「うん匠だからたつくんだよ、へんかな？」

眉をへの字に曲げる唯

「い、いえそんなことはないんですけど、平沢先輩ってそういうの
気にしない人なんですうね」

匠は唯に少し呆れた声で言った

「名前でいいよ」

「え？」

「なんか、名字だと他人行事みたいだからさ」

唯はニコツと笑い匠に言った

「え、えええ、それはさすg「お！唯いいこと言ったな、よし！た
く私たちの名前で呼んでみる、部長命令だ！」・・・」

また勢いに負けてしまった匠

「ええ！でも他の先輩は迷惑なんじゃ・・・」

匠が拒否しようとしたが

「匠君どんとこいです」

名前を呼ばれる気満々な絢

「うう・・・中野先輩なんかしてくださいます」

匠は梓に助け船を出した

「え！・・・別にいいんじゃない？それに・・・匠は私たちの名前
呼びたくないの？／／」

少し顔を赤らめながら匠の目を見つめる梓

「そ、そういうわけじゃ、うう・・・秋山先輩・・・」

やっと気を戻した澪に話しかける

「わ、私は反対だ」

匠の見方をしてくれる人がやっと現れた、が

「えー漣ちゃんとはつくんに名前呼ばれたくないの？」

唯は核心を迫るようにいった

「そ、それは・・・うう、何とも言えない」

漣はぽつきりと折れてしまった

「というわけだ、たく、わかったら早く名前を呼べ」

話がまとまったところで律は匠に言った

「で、でも「でもじゃない！」・・・はい、わかりました」

匠も、ぽつきり折れてしまった

（予感・・・あたったな）

そうして、匠の女の子の名前を呼ぶ特訓が始まった。途中で漣が、とてつもなく顔を赤くしてしまったこともあったが

「それじゃあ、最初っから言ってみろ」

律が匠にそう言った

「は、はい、唯先輩、律先輩、漣先輩、ムギ先輩、梓先輩」

と、匠は抵抗なく名前を呼べるようになった

「やっと終わった」

伸びをする匠

「へへ、たつくんに名前よんでもらえた」

そう嬉しがる唯

「あ、そういえば唯先輩」

唯に話しかける匠

「どうしたの？」

「さっきいかけたことって何ですか？」

と、匠は少し前のことを掘り起こした

「あ！そうだった、あたし、たつくんの演奏が聞きたいと思ってた

んだ」

唯が自分で言ったことを思い出した

「匠君の演奏、聞いてみたいわ」

ムギも話に加わった

「そっぴやそうだったな、あ、そうだ！たくなんか弾き語りしろよ」と、律が無茶ブリをした

「ちょ、ちょっと律、それは何がなんでm「わかりました」・・・やるんだ」

漣だそうつつこんだ

「唯先輩、ギターお借りしてもいいですか？」

匠は唯に頼んだ

「うん、いいよ、はい」

そう言つて唯は匠にギターをかした

「ありがとうございます、結構いいギターですね」

そついで匠はストラップを肩にかけた

「じゃあ弾きますね」

そついつて匠の演奏が始まつた

「well I hope you don't
z nothing's really all right/t
he Demos・・・」

（う、うまい）

（え、英語！）

（高音がちゃんと出てる）

（指使いがちゃんとできてる・・・）

（か、かっこいい）

・・・X、Y、Z」

そうして匠の演奏が終わった、が

「・・・」

5人ともぼカーンとしてた

「やっぱり先輩たちの演奏にはかてないかあ」

匠が少し落ち込んだ声で言った瞬間

「いや・・・てかあたしたち以上かもしれない」

律が口を開いた

「確かに・・・歌もうまいし」

梓も同意した

「え！そんな、俺には先輩たちみたいに胸の奥がギュツとするような演奏できませんよ」

匠はそういった

「胸がギュツ？」

ムギが聞き返した

「はい、先輩たちが演奏した新歓ライブを聞いて、なんだか胸の奥がギュツとするっていうか、わしづかみになるっていうか・・・とにかくな何か引きつけられる感じがありました」

匠は自分の感想を先輩たちに話した

「そ、そんなにすごいのか？私たちの演奏は？」

律が匠に聞いた

「はい！」

匠はまっすぐな目で律に言った

「そ、そうだね、私たちに比べたらまだまだだよ」

((唯(先輩)！))

唯と匠以外のみんなの心が一致した

「はい！だから、俺がんばります」

そう言い切る匠

「うう、直視できません」

唯は輝く匠を直視できなかった

「唯、またかよ」

「見栄を張るのもいい加減にしろよ」

「デジャブね」

「認めましようよ」

おのおの突っ込む唯以外の軽音部の女のみなさん

「それにしても、さっきの歌、聞いたことないんだけど、なんて歌なんだ？」

漣は匠に聞いた

「曲名は・・・まだ決めてないです」

匠がそう答えた

「ん？どういうことだ？」

漣は不思議そうに匠に聞き返した

「えっと、作ったばかりだからまだ曲名がないんですよ」

再度答える匠

「「「「「え！？」「「「「」

女の子全員がはもった

「も、もしかしてさっきの曲、匠が作ったの？」

少し声が震えながら梓は匠に聞いた

「え、ええ・・・まあ」

匠はそう答えた

（（（（す、すごい人が入部してきたー！！））））

4話 演奏（後書き）

こんなかんじです、ちなみに本文の歌はイーディーピー〜飛んで火にいる夏の君〜です

それではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4472ba/>

桜が丘高等学校軽音部の6人

2012年1月13日23時49分発行